

ムラのミライ 活動レポート & ニュース

2022
7

CONTENTS

認定NPO法人ムラのミライ 2021年度 年次報告

Report 1 2021年度総括および2022年度の展望について

Report 2 地域開発及び地域自立支援に係る事業

セネガル ファーマーズ・スクール

Report 3 人材育成および研修生受け入れに係る事業

伴走支援事業/プロジェクト形成研修/メタファシリテーション手法の普及・人材育成

Report 4 会計報告/組織運営

News メタファシリテーション検定を始めます

Story 30周年に向けて わたしの未来 ムラのミライ



認定NPO法人ムラのミライ

関西事務所(本部) 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町2-22 早川総合ビル3F

電話 0798-31-7940

E-mail info@muranomirai.org

ウェブサイト <http://muranomirai.org/>

Report1

2021年度総括および2022年度の展望について

中田 豊一 ムラのミライ代表理事

新型コロナウイルスの感染拡大、さらにはロシアによるウクライナへの軍事侵攻、このような世界を揺るがす大事件を前にして、芥子粒のようなNGOにいったい何ができるんだろうと、改めて考え込んでしまいます。へ理屈をこねくり回してもっともらしいことを言えるかもしれませんが、なかなかピンときませんでした。とはいえ、最近の経験から、私なりに思うことが出てきたので、この機会に共有させて下さい。

事実に基づいて、自分で決めることの意義

事業報告にあるように、海外への専門家派遣として、キルギスで仕事をしました。これまでに2度の海外渡航があり、2022年度も1か月余りの現地業務があります。私が現地で担当しているのは、JICAの酪農振興プロジェクトにおける農民の組織化とそれに伴う住民の能力強化のお手伝いです。ご存じの方もいらっしゃるでしょうが、キルギスは、ウクライナと同じように、かつてはソビエト連邦の一部でした。キルギスの人たちの多くは、「農業協同組合」という言葉から、かつての上から押し付けられた協同農場（コルホーズやソホーズと呼ばれていました）のことを思い浮かべて、否定的な反応を示す人が大半です。それだけに、ボトムアップの農民グループを作っていくためのお手伝いをするには意義があるのだとこの頃わかってきました。

「事実に基づいて、自分の頭で考え、自分で決める」、「そういう姿勢と手法を仲間内で共有しながら、組織を作っていく」ということ、つまり住民参加ということがいかに大切かということ、今のロシアのあり方を見ていて、痛切に感じています。そういう人を少しでも増やしていくことがいかに大切かということ。強がりではなく、こういう働きかけは、大きな規模でできるものではなく、組織の大小にかかわらず、現場では等身大の仕事しかできません。プロジェクトのほうはコロナ禍のせいもあって、相当の紆余曲折を経ざるをえませんでした。現地での人材は確実に育っていて、関係者は、手ごたえを感じています。キルギスに限らず、私たちがやっているのは、結局こういうことなんですよ。セネガルはもちろん、日本の地域活動でも、親子コミュニケーション講座でも、同じ手法に基づき、同じメッセージを発信しているのです。

人と人との出会いが生活に動きをもたらす

他方、ここ数年のことを振り返ると、何とも言えない停滞感のようなものが付きまとっています。おそらく皆さんも同じことでしょう。仕事のほとんどはオンラインで、出かけたとしてもいつもの人にいつものように会って、寄り道もしないでそそくさと帰宅することがほとんどです。新しい人やいつもと違った場に出くわしたりすることがめったにない日々が続いてきました。これでは元気が出ませんよね。

つまり、私たちの元気の素は、人との出会いと交わりにあるということを改めて思い知らされているということです。いい出会いばかりとは限らないでしょうが、生活のダイナミズムは、日々の交わりの中でしか生まれたいことは確かなようです。そういうものがないと、家族や仲間の間でも、話題がない。互いに新しい話題がないから、さらにコミュニケーションがなくなっていく。そして、オンラインで会った人について、「その人どんな靴履してたの」と聞けなくては、メタファシリテーションも何もありません。

その意味でも、皆さまと直にお目にかかって、「今朝は何を食べたの」から会話を始められる日が遠からず来ることを心から願わずにはられません。同時に、このリモートワークの経験からの学びをうまく組み合わせて、以前とは違ったコミュニケーションの世界を切り開いて行ければいいと考えています。

2022年度もどうかよろしくお願いいたします。



Report2 地域開発及び地域自立支援に係る事業

セネガル ンブール県農村部での循環型 持続可能な農業普及拠点構築事業

期 間 2021年3月30日～2022年3月29日
(3年プロジェクトの1年目:2024年3月まで継続予定)
場 所 セネガル共和国ティエス州ンブール県ンゲニエヌ行政村
協働者 アンテルモンド(Intermondes) *セネガルのNGO/NPO
協力者 外務省「日本NGO連携無償資金協力」

事業の概要

家族経営の小規模農家が資源を活用し、採算の取れる持続可能な循環型有機農業を実践するモデルとなる「モデル農場」を作り、その場を利用しながら村人へ研修を行うことで農業リーダー（指導員）を養成します。

事業の背景

セネガルでは、近代農業の普及や人口増加に伴い自然環境、特に水や土壌に大きな負荷がかかり、農業を継続するのが困難となった青年たちが農村から都市へと移動してしまう状況がありました。そこで、2017年から3年間実施した先行事業では、こうした農村部の青年を対象に、地域の資源を最大限に節約また活用して、効率よく農業ができるように、農業の基本となる水と土を軸にした研修を行いました。3年間で、若者たちは節水の知識や技術や植物の特性に基づいた栽培計画など、農業経営の大枠について理解することができました。しかし、彼らのこれまでの経験とは異なる持続可能な農業実践のモデルとなる農家がないこと、また研修に参加した青年だけでは家族の農業方針を変えるのが難しいという課題が残りました。

そこで、第2フェーズとして、農民たちがこうした農業を実践する際に参照できる「モデル農場」を作り、その場所で、対象者を青年に限らず、家族経営の農家が実践可能な内容の研修を行うこととしました。これまでに研修を受けてきた青年たちを中心に指導員を養成することで、実践の場を、モデル農場だけにとどめず村へと広げていくことを目指しています。また、村での実践者が増えることで、将来的に村全体の自然環境が回復していくことも期待しています。

2021年度の活動内容と成果

モデル農場の栽培圃場の整備

新たに雇用した有機農業専門家と共に農場の整備・栽培計画を立てました。計画に沿って、栽培地を区画ごとに区切り、各区画を囲むように風よけと土壌流失防止用の植物を植えました。また、連作障害を避けるように作物を組み合わせた栽培を始めました。2年目からの指導員養成研修で、指導員たちが実演練習できるような区画も準備しています。

モデル農場内の施設の整備

2年目からの研修で活用するため、研修室兼研修生用宿舎と職員宿舎、それらのための太陽光発電システム、井戸とそのソーラーポンプ、門と塀、倉庫が完成しました。

指導員養成研修のための教科書作成

研修シラバスと教科書案の作成のためのワークショップを地域の農民たちとともに開催しました。これまでの研修で学んだことや実践したことを基に、これからさらに深めたいことを確認し、研修で使う教科書案にまとめました。この教科書は2年目に完成させ、指導員養成研修の教科書として使用するだけでなく、将来的には指導員が他の農民を指導する際に使う教科書としても使います。



圃場を囲む植栽(モリンガとベチベル草)



井戸とソーラーポンプ

2022年度の活動予定とめざす成果

モデル農場の栽培圃場の整備

1年目に引き続き、モデル農場内の別の区画についても風よけと土壌流失防止用の植物を植えていきます。また連作障害を避け、且つ緑肥となる作物を組み入れた栽培を継続します。この活動により、モデル農場全体の土壌の保水力や肥沃度を上げ、生産性を上げることを目指します。

モデル農場内の施設の整備

家畜小屋と鶏舎の整備をします。これにより、モデル農場内で家畜の糞によるコンポストを効率よく生産することができ、また指導員養成研修において、コンポストの作り方や適切な施肥について実践とともに説明することができるようになります。

また、農場内でドリップ式灌設備、灌漑池と堰堤、雨水貯水槽を整備します。これにより農場での栽培で自然資源を最大限に利用し、かつ無駄を省いた水やりができることを目指します。

指導員養成研修

1年目に作成した教科書を使い、水と土壌の保全、効果的な水やり、コンポストの作り方、作物の組み合わせ方、そして作業コストの計算とバランスシートに関する指導員養成研修を開始します。指導員が、教科書やモデル農場での実演を通して、これらの知識や実践を総合的に理解し、自分の言葉で人に伝えられるようになることを目指します。

Report3 人材育成および研修生受け入れに係る事業 メタファシリテーション伴走支援事業

期 間 2020年4月1日～2021年3月31日（2019年4月より開始）
場 所 ケニア共和国ホマベイ郡ピタ準郡
協働者 特活）エイズ孤児支援NGO・PLAS
協力者 （公財）日本国際協力財団「NPO助成 成長型事業」

事業の背景

日本国際協力財団が助成するNGO/NPOの事業において、「支援者と受益者」という関係性が恒常化してしまい、それが地域住民の自立や自主的な行動を阻んでしまっていると感じ取っていた財団の担当者が、メタファシリテーション講座を受講しました。そして、この状態を打破し、事業実施団体が地域住民に適切な働きかけを行っていけるようになるために、過去/現在の助成先団体を対象に本事業を実施することになりました。団体の職員およびそのカウンターパート職員に対して、国内コンサルテーションと現地研修を行うことで、事業期間が終わっても住民の活動が続いていくような働きかけができるようになることを目指し、これまでに2団体への伴走支援を行いました。2018年度には、(特活)シェア=国際保健協力市民の会東ティモール事業担当者と現地職員に(2020年度終了)、そして2019年度から(特活)エイズ孤児支援NGO・PLASのケニア事業担当者と現地カウンターパート(以下CP団体)職員への伴走支援をしました。PLASは、この伴走支援を通じて、事業担当スタッフの住民との対話能力向上を目指し、エイズ孤児と保護者に対するライフプランニング支援事業では必須となる、住民へのカウンセリングに活かしたいと本事業に参加しました。

2021年度までの活動内容

現地研修中止からオンライン研修へ（2020年度）

COVID-19感染拡大の影響でPLASのケニアでの新規事業開始が遅れ、当初予定していたケニアでの研修が困難となったため、CP団体職員への研修とPLASスタッフ向けのオンライン・コンサルテーションを実施することになりました。

当初は現地の接続環境が整備されていなかったため、メタファシリテーションの基礎を紹介する動画を制作しました。CP団体事務所の通信速度では動画が視聴できず、スタッフが近くの町のインターネットカフェまで行って動画を視聴、その後、住民へのインタビューを実践してレポートを提出という具合で、研修参加者と講師の双方向のやりとりは実現しませんでした。PLASスタッフにとってもCP団体のスタッフにとっても全く新しい手法を動画だけで紹介され、それを村で実践しようとするれば、繰り返す感染拡大で村への訪問回数も制限される中、事業開始初期の段階でメタファシリテーションを活用するのは困難な状態が続きました。

この間、PLASのケニア事業担当者は定期的にオンライン・コンサルテーションを受けるほか、ムラのミライ主催講座やフィールド研修（鳥取県 2020年2月）に参加しました。



ZOOMを使ってコンサルテーション

現地カウンターパート団体へのオンライン研修(2021年度)

その後、日本国際協力財団からオンライン研修に必要な機材(パソコン、マイクなど)に係る助成をいただき、ようやくCP団体事務所とつないで、オンライン研修が実現しました。ライブの研修によってCP団体スタッフとの双方向のやりとりが実現し、「一般的な家庭」「平均的な収入」「この地域では～」と、村人の暮らしを一般化してしまっていることに現地カウンターパート職員が気づき、事実質問の力を実感してもらうことができました。メタファシリテーションの基礎の部分が終わると、実際の事業にメタファシリテーションを活用するために、現地研修が必要ということになり、ケニアと日本の感染状況をみながら、何度かケニア現地での研修を計画し、支援終了予定(2022年3月)を延長し、2022年4月、ムラのミライスタッフの和田が渡航して、現地研修を実施することになりました。

伴走支援2年目でやっと実現したケニアでの現地研修(2022年度)

2022年4月、コロナ禍で何度か延期になっていたケニアでの研修がやっと実現しました。PLASのスタッフと同時期にケニアに渡航した和田が、CP団体向けの研修を実施。早速、研修初日から村を訪れ、過去にPLASの支援を受けた女性に和田が話を聞きました。これまで動画やオンラインでやってきた研修の実技指導です。

最初にPLASのスタッフがインタビューし、その後和田がインタビュー、その間、CP団体のスタッフはインタビューを観察していました。その後、事務所での研修で、二人のインタビューの違い、何が聞けて、何が聞けていなかったのかスタッフに気づいてもらうようにしました。

CP団体スタッフもPLASのスタッフも、これまでに何度か事実質問を使って「インタビュー」していたはずの女性ですが、一般的な内容を聞いてしまっていたり、自分たちが支援している事業のことだけを聞いたり、と相手の現実を十分理解できていなかったことが明らかになりました。



ケニアでの研修

簡易マニュアル制作と国内コンサルテーション

2年間を通して、定期的にオンラインでPLASスタッフへの国内コンサルテーションを実施しました。2021年度はPLASスタッフも頻繁にケニアに出張できるようになり、メタファシリテーションの実践機会が増えました。そのなかで、PLASのスタッフがCP団体スタッフに「事実で聞く」という点を伝えなければならない機会も増えたのですが、なかなか相手に伝えるのは難しいのが現状でした。そこで、よくある住民とのやりとりの場面を抽出し、その特定の場面で使える事実質問を集めた「簡易マニュアル」を制作することになりました。

簡易マニュアルのテーマは、収入向上事業での住民との取り決めの一つ、「PLASが支援した初期投資分の資金の返済」をめぐるやりとりに使う事実質問となりました。PLASからCP団体スタッフへの働きかけ、質問のポイント、PLASから住民に直接話を聞く時などの質問集を制作しました。

国内コンサルテーションは、PLASスタッフの現地出張中や出張前の住民や現地カウンターパートとのやりとりについて練習を繰り返し、どういう働きかけが相手の自己肯定感を高め、相手自らが動き出すようになるのか実践的な指導を行いました。

2年間の成果

「〇〇に困っています」を鵜呑みにしない

2年間ほぼオンラインではありましたが、繰り返しの練習や実践で数多くの成果が見られました。その一つが、これまで無批判に「〇〇に困っている」と住民から言われれば、そのまま鵜呑みにしていた状態から一歩進み、意識的に「〇〇に困っている」の事実は何か、と住民との共通認識を得ようと試みるスタッフが出てきたことです。事業担当者の現地出張ごとに住民やカウンターパート職員とのやりとりを検証し、次の出張で実践するというサイクルも定着しました。

聞けていること、聞けていないことの違いがわかる

最後に現地研修が実現できたことで、やっと「どう聞けばよいのか」について研修を受けてきた人たち全員が腑に落ちる形で伝えることができました。オンラインでの研修や国内コンサルテーションの後、何度も自分たちで実践してはいても、その場、その瞬間に指導してもらえない状態が長く続けば、どうしても「事実を聞いているつもり」になってしまっていました。支援者のことを知る、自分たちの行った支援の実際のところを知るために、これまで理解していたことは何で、これから理解しなければいけないことは何かを明確にすることができました。今後、PLASやCP団体では継続して、支援の現実を知るためにメタファシリテーションの実践を続けていくことになりました。

協働団体からの声

- 2021年7月にオンライン研修が終わった後も、繰り返し「Reaching out to field reality」（途上国の人々との話し方 英語版）を読み、復習。事業や身近な人との対話でもメタファシリテーションの実践をしています。（ケニアCP団体職員）
- これまでは「女性たちのために」と思い、すぐに「帳簿をつけましょう」と、「指導」してしまうところを、思いどまりました。その代わり、まず「あなたの商売について教えてほしい」と伝え、相手の自己肯定感に配慮しながら、今日や昨日のお店の実情を聞きました。このやりとりで、直近の2日間の売り上げは、どこにも記録がされていないことがわかりましたが、その際も「だから帳簿につけておかないといけない」とは言いませんでした。すると、相手の方から、その日の売り上げの記録をつけ始めたのでした。私の働きかけで、相手が自ら動き出すことが可能である、と実感できました。（PLASケニア事業担当）
- 国内コンサルテーションで、ケニアでの研修や行事の準備について相談しました。CP団体職員に何週間も前から伝えていても、当日か前日仕事になってしまうという事例です。すると「その研修や行事の時間、場所、内容、方法などを決めたのは誰でしたか？」「事前に最低〇人（誰に）、内容のどの部分を伝えるのか、というボトムラインを決めていましたか？」と聞かれました。聞かれているうちに、「相手（CP団体職員）が決定する」という要素がなかったこと、CP団体との間にボトムラインの共通理解が欠けていたことに気づきました。（PLASケニア事業担当）

Report3 人材育成および研修生受け入れに係る事業 連続研修「NGOによる住民主体型プロジェクト 形成・実施のための方法論と技能」

期 間 2021年4月1日～2022年3月31日(2021年12月より事業開始 2022年9月に事業終了)
場 所 オンライン)
協力者 JICA「NGO等提案型プログラム」
事業費 12,191千円

事業の背景

ムラのミライが長年にわたって取り組み、体系化した住民主体プロジェクトの企画形成と実施のために必要な方法論と技能を、国際協力に取り組むNGOスタッフに共有・伝達する機会として企画しました。さらに、本研修の実施を通じて確立した住民主体プロジェクトの企画形成手法に係る研修プログラムを事業化することを視野に入れています。

事業の背景

住民主体やエンパワーメントを単なる言葉ではなく実体を伴うものとするためには、それらが何を指すのかを計画段階で明確化し、その実現の道筋と方法を計画の中にしっかりと組み込んだ上で実施する必要があります。ムラのミライは、そのための方法論を言語化し、書籍「途上国の人々との話し方-国際協力メタファシリテーションの手法」や講座で広く共有していますが、この技能をさらに実務レベルで習得し、活動に反映させたいという声を受けて、この連続研修を企画しました。



東京での研修は、会場とオンライン会議をつないだハイブリッド形式で実施しました

2021年度の活動内容

研修とコーチングを組み合わせて実施

住民主体型の国際協力プロジェクトを実施（予定）のNGO/NPO等のプロジェクト担当者・管理者の方々15団体29名を対象に、2021年4月から研修をスタートしました。今年度はオンラインでの集合研修5回を実施するとともに、集合研修の間に1-2団体ずつのコーチングを各団体4-6回実施しました。

研修-実践-研修（実践内容の検討）のサイクル

研修では毎回必ず、前回までのふりかえりセッションを実施しています。研修での学びを実践に移した報告が回を追うごとに充実しつつあり、他団体の報告と、それに対する講師からのフィードバックが、参加者全体にとって大きな学習材料となっています。特に、コロナの影響で活動地に渡航できない参加者にとって、活動地に出張/駐在した参加者やオンラインでのやり取りを進めた参加者からの実践報告は、渡航再開後のシミュレーションをする機会ともなりました。

2022年度の活動予定

集合研修を1回と質疑応答セッションを実施したのち、成果報告会を実施して事業終了予定です。終了後にふりかえりをおこない、当初の到達目標や研修全体の組み立て等の妥当性を検討して、今後のプログラムづくりに活用したいと思います。

研修参加者の声

- （今までの住民とのやり取りは）自分が聞きたいことにつなげてしまう質問が多かった。講師に深掘りしてもらってタジタジになり、自分たちが知っていると思っていたこと（例：カウンターパートと想定している住民組織の役割など）を知らないと感じた。
- 研修とコーチングの後、村に行って試してみた。今回は挨拶から始めて色々な質問をする中で、日々の収支をつかみたいと思っていた。対話を通じて、農業資材や教育費といった日々の支出以外に、冠婚葬祭や災害などイレギュラーな支出があると気づいてもらった。その結果、支出の管理をしましょうかというところには至らなかったが、ホップ・ステップ・ジャンプのステップくらいにあたる気づきを得てもらうことはできたかなと思う。村の人をよく理解するということにもつながったし、自分が謙虚な気持ちになれたのが良かった。今まで、上から目線だったと感じた。
- 実践してみた報告に対して、講師からさらに質問されると、10分ほどで様々なことが浮かび上がってくる。練習を重ねて、自分でもそれくらい掘り下げて聞けるようになりたい。
- 一番印象的だったのは、農家から「あれがない、これがない」と言われる関係性は、プロジェクトを持ち込んでいたところに原因があったというところ。今後は、最初からプロジェクトありきではなく、違うところから始めていけばいいなと思った。
- 一緒にコーチングを受けた団体が具体的な（ステップバイステップの）アクションプランと、現場を想定した事実質問を作成しており、とても勉強になった。その後、所属団体からの参加者と一緒に、現場に行った時のことを想定して事実質問を作り直した次回現地に行った時、現地スタッフに事実質問をやってみせられるように練習したい。

Report3 人材育成および研修生受け入れに係る事業 メタファシリテーション手法の普及・人材育成

メタファシリテーション手法を紹介するセミナーに、人事担当者など職場でのコミュニケーションに携わる人向け/子どもの保護者や子ども支援に携わる人向けという二種類の対象者別セミナーが加わりました。セミナー参加者へのヒアリングも実施しており、今後、それぞれの状況や文脈に応じた講座企画を行っていく予定です。

教材や指導方法の面では、講師を担う認定トレーナーのミーティングを不定期に開催し、講座の構成・内容や進め方を共有・検討した上で、年度末には教材のリニューアルに取り組みました。より明確で、着実な技術取得を後押しする内容・教材となりました。

さらに、このニュースレター巻末で紹介している認定制度の開発に着手しました。2021年度中に3級試験のテスト実施を複数回おこない、試験内容を最終化しました。

ムラのミライ主催講座

メタファシリテーション手法を紹介するセミナー

メタファシリテーション体験セミナー

11回開催(すべてオンライン) のべ97名が参加

職場の問題を解決するためのコミュニケーション講座

5回開催(すべてオンライン) のべ32名が参加

「子どもの話を聴く技術」体験セミナー

2回開催(すべてオンライン) のべ30名が参加

メタファシリテーション手法の基本技術を学ぶ講座

メタファシリテーション講座ステップ1

13回開催(すべてオンライン) のべ84名が参加


メタファシリテーション講座ステップ2

10回開催(すべてオンライン) のべ39名が参加

メタファシリテーション講座ステップ3

8回開催(すべてオンライン) のべ31名が参加

メタファシリテーション講座
ステップ1(前半)



認定NPO法人ムラのミライ
<https://muranomirai.org>

認定NPO法人
ムラのミライ

練習

事実を聞く質問とそうでない質問を
区別するドリル

事質質問で時系列で聞いてゆくと…

変遷
ターニングポイントが浮かびあがる

起点 → 直近 → 今 → 未来

一番最初にそれが起きたのはいつ? → どこで?

一番最近それが起きたのはいつ? → どこで?

確かに去年よりかなり高めですね。昨日もお菓子は食べましたか? → 食べました。

そのお菓子は家のお菓子のどこにあったのですか? → 仏壇です。お供えもののお菓子です。

お家では、Cさんの他に仏壇のお供えもののお菓子を食べる人はいますか? → 去年まで孫と一緒に住んでいたんで、孫も食べてました。あ、そういえば、孫が家を出て、いなくなってから孫の

なるほど〜




講座の教材:様々な演習を繰り返しながら学びます

1. 「なぜ」「どう」を
使ってしまった事例

○やり取りを簡単に紹介
(「なぜ」「どう」を我儘した事例、
使ってしまった事例)

○やってみた感想

○やってみて出てきた疑問点など



海外への専門家派遣

JICA経済開発部(キルギス)

期間 2021年2月～2022年3月 この間に2回の渡航とオンライン業務

専門家 中田豊一

主催団体 JICA経済開発部農業・農村開発第一グループ第二チーム

プロジェクト名 キルギス国 チュイ州市場志向型生乳生産プロジェクト(農民組織化)

対象者 中核農家

農民組織化(メタファシリテーション研修)の短期専門家として計4回派遣。1度目は3月と4月にオンラインで、2度目は9月に現地で、中核農家対象に研修を実施。さらに、3度目と4度目を合わせる形で2022年の1月から2月にかけての1か月余りを現地で研修と仕組みづくりに従事しました。

国内での専門家派遣

三重県立看護大学「公衆衛生看護方法Ⅳ」

2021年6月23日(水)

講師 平野貴大

参加者 三重県立看護大学の学生 約100名

日本福祉大学通信教育部「国際開発と貧困問題(テーマ:福祉社会開発入門)」

2021年6月26日(土)

講師 原康子

参加者 介護職、社会福祉関係職員、看護師など 約27名

JICAミャンマー「メタファシリテーション基礎研修」

2021年6月～7月

講師 中田豊一

参加者 JICAミャンマー事務所スタッフ 約30名

(特活) 泉京・垂井「揖斐川流域で学ぶローカル・ガバナンス(地域のお作法)発見方法」

2021年6月～8月 この間にオンライン講座4回、フィールド講座1回

講師 和田信明、原康子

参加者 NGO/NPOスタッフ、JOCV、大学教員、大学生など 約30名

(特活) おーでらす「メタファシリテーション・オンラインコーチング」

2021年7月～2022年3月 この間にオンラインコーチング6回

講師 和田信明

参加者: (特活) おーでらすスタッフ 3名

JICA関西、JICA東京「JICA基金(チャレンジ枠)伴走支援」

2021年9月1日(火)、7日(月)、12月16日(木)、2022年1月20日(木)

講師 宮下和佳

参加者 ①カディプロジェクトスタッフ、JICA関西スタッフ 3名

②パタゴニア・エクスペディションスタッフ、JICA東京スタッフ 2名

岐阜県関市「メタファシリテーション入門講座」

2021年9月4日（土）

講師 原康子

参加者 一般市民、地域支援職員 26名

日本福祉大学大学院「『日本および東アジア地域』開発研究」

2021年9月24日（金）

講師 原康子

参加者 NGO職員、福祉・介護関係職員など 約16名

福島県（（特活）おーでらす受託）「鳥獣害対策専門職員のためのメタファシリテーション入門」

2021年9月28日（火）

講師 宮下和佳

参加者 市町村の鳥獣害対策専門職員、鳥獣害対策コンサルティング会社職員 5名

（特活）a little「スペシャル・サポーター（SP）研修」

2021年10月7日（木）

講師 原康子

参加者 a littleでひとり親を中心とした家事・育児に携わる支援者 約7名



泉京・垂井主催のフィールドワークで訪問した
諸家集落を歩く参加者

立命館大学「現代社会のフィールドワーク」

2021年10月26日（火）、11月2日（火）、11月9日（火）

講師 原康子

参加者 主に1、2年生 約50名

JICA中部「住民を巻き込む多文化共生～国内と海外の事例より～」

2021年11月20日（土）

講師 原康子

参加者 中部4県（愛知県、岐阜県、三重県、静岡県）にある団体で、多文化共生の活動をしている人、活動予定の人 18名

菊川中学校PTA「令和3年度研修会」

2021年11月28日（日）

講師 原康子

参加者 菊川中学校の保護者と生徒（一部） 22名

JICAイラン「住民参加型地域開発コミュニケーション能力向上ワークショップ」

2022年1月10日（月）～2月23日（水） 3時間×4回のワークショップを2シリーズ（対象機関別）実施

講師 原康子

参加者 ①イラン内務省都市地方自治管理機構（MRMO）
②イラン農業開発推進省 農業研究教育普及機構 農村女性活動支援局
62名（オブザーバー参加41名）

福津市未来共創センター「メタファシリテーション体験セミナー」

2022年2月17日（木）

講師 宮下和佳

参加者 福津市未来共創センター設立準備スタッフ 6名

津和野町地域包括支援センター「メタファシリテーション体験セミナー」

2022年3月2日（水）

講師 平野貴大

参加者 津和野町地域包括支援センタースタッフ等 15名

ムラのミライの講師・専門家派遣

いつものミーティング、いつもの内部研修、いつもの授業・・・いつもの展開を抜け出して、新しい視点・洞察を得たい、活動に、組織に新しい風を吹き込みたい・・・そう考えるあなたを、ムラのミライのコンサルタントがお手伝いします！

内容・対象者・予算など柔軟にご相談に応じます。
お気軽にお問い合わせください。



会計報告/組織運営

■活動計算書(2022年3月31日現在) (単位:円)

■貸借対照表(2022年3月31日現在)

(単位:円)

科目	金額
I 経常収益	
1. 受取会費	397,000
正会費	397,000
2. 受取寄付金	1,779,174
個人	1,759,174
企業・団体	20,000
3. 受取助成金等	51,113,356
受取民間助成金	2,500,000
受取国庫補助金	48,613,356
4. 事業収益	26,716,861
自主事業収益	7,051,814
JICA受託事業収益	19,665,047
5. その他収益	123,060
受取利息	220
雑収益	122,840
経常収益計	80,129,451
II 経常費用	
1. 事業費	
(1)人件費	22,031,697
給与手当	19,390,202
法定福利費	2,422,453
福利厚生費	219,042
役員報酬	0
(2)その他経費	53,787,870
事業費計	75,819,567
2. 管理費	
(1)人件費	645,970
給与手当	572,817
法定福利費	71,563
福利厚生費	1,590
役員報酬	0
(2)その他経費	1,281,281
管理費計	1,927,251
経常費用計	77,746,818
当期正味財産増減額	2,382,633
前期繰越正味財産額	16,131,182
次期繰越正味財産額	18,513,815

科目	金額		
I 資産の部			
1. 流動資産			
(1) 現預金	19,487,518		
(2) 未収金	13,574,222		
(3) 棚卸資産	1,263,275		
(4) 仮払金	0		
流動資産合計		34,325,015	
2. 固定資産			
(1) 有形固定資産			
什器備品	0		
有形固定資産	0		
(2) その他資金			
保証金	145,000		
その他資金計	145,000		
固定資産合計		145,000	
資産合計			34,470,015
II 負債の部			
1. 流動負債			
(1) 未払金	2,411,899		
(2) 未払消費税	341,400		
(3) 未払法人税等	82,000		
(4) 預り金	1,245,901		
流動負債合計		4,081,200	
2. 固定負債			
(1) 長期借入金	11,875,000		
固定負債合計		11,875,000	
負債合計			15,956,200
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		16,131,182	
当期正味財産増減		2,382,633	
正味財産合計		18,513,815	
負債及び正味財産合計			34,470,015

■会員、サポーター、ご寄付

正会員	40名
年間サポーター	42名
マンスリーサポーター	46名
ご寄付	19件(古本リサイクル・書き損じハガキ含む)

■職員 *記載は入職順。役職名と勤務形態を記載

和田信明 海外事業統括/テレワーク(京都府)
原康子 研修事業チーフ/テレワーク(京都府)
前川香子 海外事業チーフ/テレワーク(愛知県) 2021年2月より産休・育休
宮下和佳 専務理事/テレワーク(香川県)
山岡美翔 理事、総務会計/テレワーク(兵庫県)
菊地綾乃 海外事業コーディネーター/テレワーク(秋田県)
加藤愛子 研修事業コーディネーター/テレワーク(愛知県) 2021年8月退職
平野貴大 事業コーディネーター

■役員 *記載は職位・50音順。役職名と所属を記載

中田豊一 代表理事/参加型開発研究所 所長
山田貴敏 副代表理事/(株)笠原木材 代表取締役社長
宮下和佳 専務理事/(特活)ムラのミライ 職員
久保田絢 理事/(特活)ムラのミライ コミュニケーション・ディレクター
小森忠良 理事/岐阜市議会議員
安野修 理事/国際協力コンサルタント
山岡美翔 理事/(特活)ムラのミライ 職員
和田美穂 理事/社会福祉士
岡本眞弘 監事/税理士法人岡本会計事務所 代表社員
河合将生 監事/NPO組織基盤強化コンサルタント office musubime 代表

■2021年度の組織運営

所轄庁(兵庫県)への書類提出や調査を経て、認定NPO法人の有効期間を更新することができました。新たな認定期間は、2021年7月15日から2026年7月14日(5年ごとの更新)です。また、2023年に団体設立30周年を迎えるのを機に中期方針を策定しようと、1月から月2回ペースでミーティングを開始しました。スタッフおよび認定トレーナーが集まって、ここ数年、自分がムラのミライと一緒にやってきたこと(事業や講座・研修、組織運営など)の振り返りをおこなっています。

監査報告書

2022年5月12日

特定非営利活動法人 ムラのミライ
代表理事 中田豊一 殿

監事 岡本 眞弘

監事 河合 将生

特定非営利活動法人促進法第18条の規定に基づき、特定非営利活動法人ムラのミライ
2021年度(2021年4月1日から2022年3月31日まで)における理事の業務執行状況
および財産状況について監査した結果、適正かつ正確であることを認めます。

以上

メタファシリテーション検定を 始めます

メタファシリテーションとは

ムラのミライが地域づくりの活動現場で作り上げてきた「メタファシリテーション」は、聞き手（ファシリテーター）が話を聞く相手（当事者）との信頼関係を構築しながら、当事者自身が問題や解決方法に気づくよう会話を組み立てていく手法です。国際協力の分野だけでなく、子育て、医療・福祉、ビジネス（人事・マーケティング）など幅広い分野で活用されつつあります。

正しく伝える人を増やしたい

今までムラのミライでは、「自分もメタファシリテーションを活用できるようになりたい」という方のために、講座や研修を開催してきました。講座を修了し、実践されている方々の中から「私もメタファシリテーションを伝えたい」「正しく伝えたいので、ムラのミライの認定トレーナーになりたい」というお声や「自分がどれくらい習熟できているのか知りたい」というお声を頂くようになりました。

そこで、ムラのミライでは、メタファシリテーションの技術を、基礎的な技術から難易度の高い技術へと細分化し、段階的に習熟度合いを確認していただけるよう、新たに検定試験をスタートすることになりました。

認定トレーナーとは

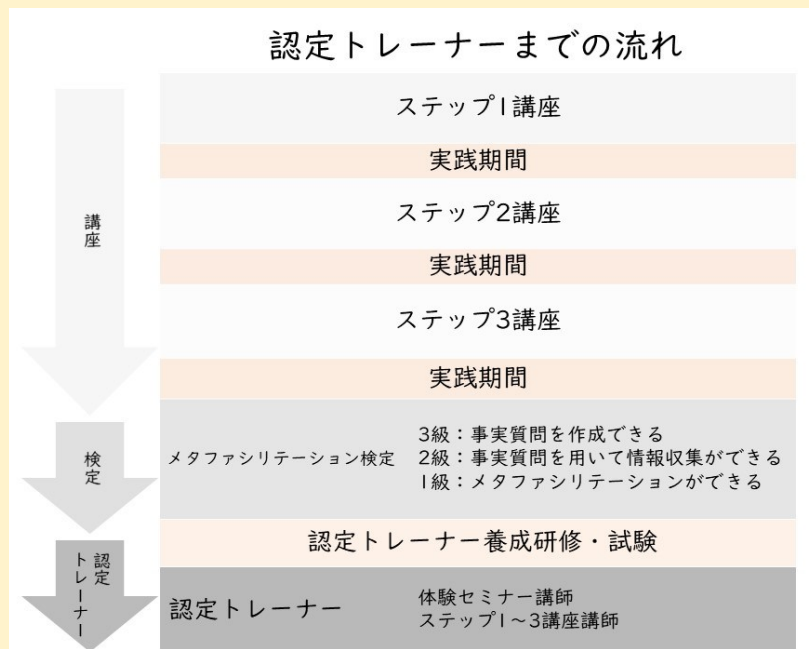
同検定開始以前は、メタファシリテーション手法の開発者である和田信明・中田豊一から直接、技術指導を受けた人しか認定トレーナーという名称を使用することができませんでした。そこで新たにメタファシリテーション検定1級合格者を対象に「メタファシリテーション認定トレーナー養成研修」を開始し（2023年度中）、ムラのミライ主催講座での講師やご自身でも講座を企画・開催していただける「認定トレーナー」を増やしていきたいと考えています。

メタファシリテーション検定の概要

級	試験内容	到達目標	受験資格
1級	事前課題・実技試験	メタファシリテーションができる	2級に合格していること
2級	事前課題・筆記試験・実技試験	事実質問で情報収集ができる	3級に合格していること
3級	筆記試験・実技試験	事実質問を作成できる	メタファシリテーション講座ステップ1~3を修了していること

今年9月からスタート

2022年9月、まずは3級試験を実施します。認定トレーナーを目指す方、自分がどれだけメタファシリテーションができるか確認したいという方、ぜひ挑戦してみてください。試験の準備が整い次第、ムラのミライHPで受験申し込みの受付を開始します。



メタファシリテーション検定 Q&A

どんな試験なの？

筆記試験・実技試験・実践事例の提出（事前提出）を組み合わせ、級ごとに設定された到達目標を達成しているかどうかを判断します。

検定を受けるメリットは？

合否通知と共に、合否と共に、習得できている点やさらに技術を磨いていく必要がある点などのポイントをメールでお送りします。ご自身のできているところ/できていないところ、得意なところ/不得意なところを知り、着実に技術を習得し、技術を磨いていくための材料にしてください。

合格したらメタファシリテーションを教えていいの？

メタファシリテーション検定は、ご自身の習熟度を確認していただくものなので、1～3級に合格しただけでは「メタファシリテーション認定トレーナー」として講師はできません。1級合格後、「メタファシリテーション認定トレーナー養成研修」にご参加ください。ムラのミライが主催する講座の講師として活動できるとともに、ご自身で講座を開催することも可能となります。

講座を受けてからずいぶん経つけど受験できる？

講座を受けてから期間が空いてしまっている、いきなり受験する自信がない、受験してみたものの難しかったなど、検定に向けて復習しておきたい時は、ムラのミライ主催のメタファシリテーション講座をリピーター割で受講して頂けます。また、個人向けのスキルアップコーチング（認定トレーナーがマンツーマンで受講者の理解度に合わせて指導）もご利用ください。

わたしの未来 ムラのミライ

2023年に30周年を迎えるムラのミライ。活動を担うスタッフ・役員や認定トレーナーが集まり、各自がムラのミライと一緒にやってきたことを振り返り、今後の中期方針を策定するための話し合いを始めました。ニュースレターでも、担い手によるふりかえりと今後へのメッセージを連載でお届けします。



セネガルの子どもたちと

加藤愛子

地域おこし協力隊 / メタファシリテーション認定トレーナー

大学卒業後、一旦は一般企業に就職するものの、海外で現地の人と顔を合わせて活動したいと思い、青年海外協力隊(コミュニティ開発・スリランカ)に参加。その後、ヘルニアを患いヨガとアーユルヴェーダの資格取得・インストラクターとして活動しつつ自身の療養。2019年よりJICAのNGOインターン制度によりムラのミライでインターンを開始。農業プロジェクトを行っているセネガルにも渡航し、現地で再度メタファシリテーションの効果を実感した。2020年より外務省主催NGOインターン・プログラムを活用し、職員として自主講座の企画・運営を担当。2021年10月からは学んだメタファシリテーションをフィールドワークで実践したいと思い、高知県日高村の地域おこし協力隊として「村まるごとデジタル化事業」に従事している。

ムラのミライとの出会い

2011年、大学3年生の時に国際協力のゼミに入り、モノだけを与える支援に疑問を持っていました。住民主体・持続可能な支援とはどんなものか知りたく、選んだ留学先のインドでソムニード(現ムラのミライ)が行っていたスタディツアーに参加。そこで衝撃を受けたのは、日本人スタッフではなく現地の村の青年が「自分たちは村の課題に気づいて、こんな取り組みをしてきて、これから村をこんなふうにしていくんだ」と自信たっぷりに語ったことです。この時初めてメタファシリテーションに出会い、この手法を使うと村の人のモチベーションや能力を引き出すことができると実感しました。

地域おこし協力隊になったけど…

ムラのミライスタッフから学んだメタファシリテーションをもっと実践してみたいと思い2021年10月から高知県日高村の地域おこし協力隊に着任。担当するテーマは日高村が防災対策や情報発信にスマートホンの普及を進める「村まるごとデジタル化事業」での現場からの声の吸い上げです。特にスマホ普及率の低い高齢者層に向けた事業ですが、どんな点でガラケーからの乗り換えに躊躇しているのか、スマホに替えてからどんなところに難しさを感じているのか等を聞き集め、役場やプロジェクトに関わる企業にフィードバックする役目でした。

村が設置した、スマホに関する疑問を解決するスマホよろず相談所に入り、来てくださった方にお話を聞いていきました。しかし“スマホ”についてメタファシリテーションを使いながら質問するも、会話の切り口がワンパターンになっていき、それ以上話が広がらずマンネリ化していきました。

「いつからスマホを使い始めたんですか？」

「これが初めてのスマホですか？」

「その前は何かという機種を使っていたんですか？」

スマホ、スマホ、スマホ…よほどスマホが好きなら話は別ですが、そればかり聞かれても、相手のセルフエスティーム（自尊心）は上がりません。そんな悩みをムラのミライのスタッフに相談したところ、さすがメタファシリテーションの達人たち。直接的なアドバイスではなかったのですが「スマホはいったん置いておいて、まずはその方々がどんな人生を歩んできて、現在どんな生活をしているのかを聞くことが大事なんだ」と気づきました。



高知県日高村、チェンジ、KDDI、「村まるごとデジタル化事業」を共同で推進する連携協定を締結

「村のこと教えてください」から深まる対話

そこから視点を切り替え、まずはスマホ相談所に来てくれた方のことを知るべく、いろんな質問を投げかけるようにしてみました。

Episode-1

加藤 (Mさんが腰に下げていた使い込まれた籠を見て)それ素敵ですね！いつから使っているんですか？

Mさん へへへ、もう10年くらいになるかな。

加藤 そんなに前から！物持ちいいですね。もしかして、ご自身で作られたんですか？

Mさん 実はそうなんだよ～。山で蔦を切ってきてね。今日もここに来る前に山に行きおったがよ。

と言って、村が推奨している健康管理アプリ（歩くと地域で使えるお買い物ポイントがもらえる）を見せてくれました。

加藤 今日は雨降っているのにもう1万歩ちかく歩いていますね！（この時、朝の10時頃）

Mさん そうなんよ。雨でも山に猪が畏にかかっているか見に行きおった。

加藤 え！雨でも行くんや。で、かかってたんですか？

Mさん おうよ、40キロのがかかってたよ。

加藤 すごい！誰が仕留めたんですか？

Mさん 一緒に行った若い猟師だね。

加藤 もう捌いたんですか？

Mさん うん。今は猟の時期だからお肉食べるけど、それ以外の時期は獣害駆除の時期になるから食べないけどね。（冬場の寒い猟の時期は脂が乗って美味しいけど、それ以外の時期はあまり脂が乗っていないので食べないとのことでした。脂が乗っていないのが好きで食べる方もいらっしゃるそうです。）

加藤 知らなかった！猟の時期はいつからいつまでですか？

Mさん 11月15日から3月末までやね。その時期は獲物のしっぽ、写真、書類を役場に提出するんだ。

加藤：そうなんです。今回は写真を撮りましたか？

M：若い衆が撮っていたね。自分もデジカメで撮ったけど。

加藤：あれ、スマホも持って行ってたんじゃなかったですっけ？

Mさん：あ、そうやね。スマホでも撮れるけど、デジカメが慣れてるから。スマホであんま写真撮ったことないなあ。

加藤：そうですか。獣害対策の時期に写真を撮ったり提出書類を作ったのは誰ですか？

Mさん：若い衆。自分がやらなくてもやってくれるもん。

（数回分の猟を思い出してもらいましたが、毎回若い衆が作っていて書類作成には困ってないとのことだったので「スマホで撮ったら書類作成も簡単にできますよ」と言いたくなったのを引っ込めました。）

加藤：そっかそっか～。次回いつスマホ教室に来られるか予約しました？

Mさん：うーん、してないね。でも、次来た時は猪をスマホで写真撮って見せるさね！

次に来てくださったときには、写真どころか、撮影した猪の動画を見せてくださいました。さらに、籠を作ってプレゼントしてくださいました。



頂いた籠は植物ポットとしてお部屋を彩っています。私のお気に入りアイテム。

Episode-2

日高村スマホユーザー最高齢の92歳でスマホを使い始めたKさん。スマホ相談所に来られた際に、自己紹介して、お互いの家族のことをお話していると、コロナ禍で2年会えていないお孫さんが県外にいるとのこと。LINEビデオを使ったことがあるかどうか聞くと、ないと言われたので、その場でお孫さんにコールしてみました。

すると、タイミングよく繋がリ、お2人とも嬉しそうにお話されていました。Kさんが「お顔を見ながら話したのは本当に久しぶり。話せてよかった。ありがとう」とすこし涙目で言うくださり、こちらまでジーンとききました。



お孫さんと初めてテレビ電話



それ以来、Kさんが仲良くしてくださり、「わたし土曜の朝にモーニングに行くがやけど、あんたも来ん～？」と誘ってくださいました。地域のおじいちゃん・おばあちゃんの憩いの場になっているアットホームな雰囲気が気に入リ、そこから毎週通うようになりました。そこで土佐弁や地域のこと、皆さんのこれまでの人生のあれこれを教えてもらっています。

なつかしい記憶がよみがえる 参加型写真展

モーニングに集まる方は90代の方がほとんど。いざ“昔”の話の聞こうにも“昔”とはいつの時点なのか。長い人生の中の記憶を思い出すので、時系列があちこちに飛んでしまったり、ご本人もいつごろの事だったか覚えていないこともありました。また、特定の地名や事柄が話題にでると、土地勘の無い私には想像しにくかったり。そこで、写真があったら彼らもピンポイントに当時を思い出しやすく、私も写真の中に写っていることを特定して当時の様子を聞きやすいと思い、日高村写真展を企画しました。「村のこと、ここで暮らしてきた人のことを知りたい」といった、ほんの好奇心が始まりでした。

仲良くなった日高村の方のお家に眠っているアルバムや資料から白黒の写真をお借りし、昨年11月に新築になった日高村役場に展示しました。写真を集める中で、持ち主さんもそれがいつごろどんな背景で撮影されたものか分からないものも多々あり、説明が書けませんでした。移住して半年の私が知っている僅かな情報を発信するよりも、当初のように村の方から記憶や経験を教えてもらいたいと思い、皆さんが教えてくださったエピソードを小さな紙に書き写真のそばに張り足して育ててもらおう“参加型写真展”を思いつきました。

写真を介して、記憶や経験の共有の場となるように。さらに嬉しかったことは、数年会っていなかった方が会場でばったり再開して同窓会のようになっていたり、知らない人同士が写真を見ながら教え合っていたり、写真を介して会話が生まれる場となったことです。

お話を聞くときはメタファシリテーションを使いながらシンプルな事実質問を投げかけ、当時を思い出すお手伝いに徹すると、面白いエピソードがたくさん出てきて、暮らしの様子が臨場感をもって見えたのが楽しかったです。



私の個人的な好奇心から始めた企画ですが、村長や教育委員会から村の歴史民族資料として貴重なため、聞いたエピソードは写真とともに共有して欲しいと言われ、すこし村のお役に立てたことが嬉しくなりました。また、写真展はアートと調査を兼ねられる有効手段として、今後も継続できないか検討したいとも言われました。

実際に、写真があると当時の事を鮮明に思い出しやすいようでした。また思い出したことは話したくなるようなので、お話を聞ける条件が揃いやすいと実感しました。

来場者は1日平均40名。20日間でのべ800の方が来場してくださいました。日高村でこういった写真展は初めてだったそうで、来てくださった方からは「懐かしい」「親戚や友達が写っていて、久しぶりに会えたようで嬉しかった」と言って頂けました。また、「あんたよう企画してくれたね」「第2弾も楽しみにしとるきね」「えい人が来てくれて良かった」と、温かいお言葉をかけていただき、皆様に愛される写真展となったことをとても嬉しく思います。

村の人を知り、村を知る 地域おこしに関わる人に「聞き方」を伝えたい

嬉しいことに、こちらに来て同じ協力隊や役場の担当の方から「加藤さん、どうやって村の人とそんなに仲良くなるの?」「そんな面白い人いるんだ。どこで知り合って仲良くなったの?」と言ってもらえることが多々あります。メタファシリテーションを使いながら相手のことをもっと知りたいと想って話している、と説明すると「確かに、丁寧に話を聞いているのが分かる」といっていただけました。

また別の協力隊の方から活動の一環でインタビューしたり、信頼関係を築く上でどんな質問をしたらもっとうまく会話ができるか知りたいと言われることがありました。今後はそういった地域おこしに関わる方に対して勉強会や講座ができたらなと思っています。また、地域の歴史文化調査に関わる方と一緒に村を歩きながら村の方にお話を聞くフィールドワークもしたいです。メタファシリテーションを活用すると当時の様子が鮮明にとらえやすく調査にも活用できることを伝えていきたいです。



ムラのミライについて

「ない」ことは本当の問題なのか？

認定NPO法人ムラのミライは、1993年に岐阜県高山市で設立されました。設立当初は「インド山村部の貧困層を助けよう」と、識字教室や収入向上活動など、「ない」ものを投入する支援から始まりました。しかし、さまざまな活動を経て、都市化と市場経済化の進展がコミュニティとコミュニティの維持してきた自然資源やセーフティネットを衰退させ、多くの社会課題を生んでいること、それが海外・日本に共通する構造であることに気づきました。



コミュニティに「ある」ものを引き出し、課題解決を促す

そこで、住民との対話を通じてコミュニティに「ある」もの＝彼らの持つ経験や知識を引き出し、住民自身による課題分析・解決を促す「メタファシリテーション」手法を開発。徹底的に住民主体にこだわり、インド、ネパール、セネガルで、コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を創り出すためのプロジェクトを実施してきました。

地域づくりで、医療で、子育てで

「●●がないから、××ができない」という思い込みをひっくり返し、住民を本気で課題解決に向かわせる力を持つと、高い評価を受けるようになったメタファシリテーション手法。この手法を書籍やセミナー・研修で伝え、住民の行動変化を促すスキルを持つファシリテーターを育成してきました。国際協力分野だけではなく、日本国内での地域づくりや、医療・福祉、子育てといった分野で実践する人が増えつつあります。



ご寄付やサポーターを募集しています

ムラのミライはこれからも、日本と海外の地域コミュニティで、より多くの人々がメタファシリテーションを使って、その地域の人々が選び取る未来を実現していくお手伝いをしていきます。具体的には、

- 日本・海外でプロジェクトの段階に応じた研修やフィールドワーク型研修を企画・開催していきます
- メタファシリテーションの事例やQ&Aを蓄積し、ブログや書籍で発信していきます
- 国内外のより多くの人々に講座を届けるため、ムラのミライ認定メタファシリテーション・トレーナーを養成していきます
- 若い世代に安価に講座を受講してもらうための仕組みをつくります

ぜひ会員・サポーターになって、メタファシリテーションの進化・広がりを応援してください！
あなたの毎月のサポートがファシリテーターを育てます。

ご寄付・サポーターお申し込みはこちらから：<https://kessai.canpan.info/org/somneed/>

